

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目

構造主義言語学における「音素」概念の存在論的考察

氏 名

ハス

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 序章 ソシュールの構造主義的思考

ソシュールの構造主義的思考によれば、言語とは、ひとつの体系であり、言語外の事物とは独立して、その内在的な秩序によって成立している。あらゆる部分が「共時的連帯関係」によって結ばれていて、そのような部分はまずは<全体的体系>、あるいは<全体的構造>から「考察」されねばならないという、「部分に対する全体の優位」という原理が主張されていた。言語の<音韻体系>というものは、まさに「有機的全体」を成していた。そして、その構成要素である「音素」は、その体系の内部での相対的な位置によって規定されるのであり、その全体自体は、それに内在する法則に従って構築されているという。この「構造」という概念は、音素からなる音韻体系の分析において要請された考え方であった。ソシュールの理論では、ラングは社会的存在であるから、ラングをひとつの構造を有するものと見ても、それぞれのパロールの規範、ないしは規約となっているのであり、ルール体系であるとも言える。

#### ・第1章 ソシュールにおける言語記号の特性と恣意性

ソシュールの言う言語記号の「恣意性」のテーゼは、現実の側からの影響による「恣意的な変更」の必要性を否定していると解釈できる。

#### ・第2章 ソシュール『一般言語学講義』における音韻論と音声学

シニフィアンをどう捉えるかという問題に関し、発音の側での調音運動を重視するか、聞き手側での聴覚印象を重視するかで見解が分かれるが、ソシュールがなぜ聴覚印象、ないしは聴覚イメージを主としたのかの理由を議論した。

#### ・第3章 ソシュールの構造論的思考と「価値」概念

本章では、共時言語学での「言語価値」なる概念に焦点をあてて、ソシュールの構造論的思考に関して、存在論的考察を行った。二重体であるシーニュに関しては、同じ言語記号としてのシーニュが、その都度の発音されるその時点で、同一性が生成されると考える。つまり、「同一の語」が発音されたと認識されたとされる時点がシーニ

ユの同一性の源泉である。言語記号の恣意性ということは、聴覚イメージであるシニフィアンと「観念」である心理学的実体としてのシニフィエとの対応の選択が、恣意的であるということである。「価値」とは、あくまでも体系内の要素に関する相対的、ないしは慣例的規定をいい、ソシュールの言語論における最も構造主義の色彩の強い概念であるといえる。価値が全く相対的なものと捉えられている限り、観念と音声との連結は、徹底的に恣意的であると言える。われわれの見解としては、ソシュールは、シーニュにおいて<指示された内容>を指すシニフィエ、つまり「観念」ないしは「概念」と、それとは別にそのような言語記号の使用面に注目し、社会的承認に裏付けられた存在理由として、「価値」というものを考え出した。

・第4章 <マルティネにおける「二重分節」と言語の恣意性>

人間の言語体系は、その内部に抽象的な概念体系を保持しているのであり、その体系を構成している個々の概念は互いに「離散的」である。つまり、概念間の差異は、原理的に離散的、ないしは非連続である。言語体系とは、全て離散的な要素からなる体系なのである。

第5章<機能主義と構造主義---音声学と音韻論の区別についてのマルティネの見解--->

「音素」とは、関与特性の「束」そのものとみてよい。マルティネの用語では、「関与的特性」と表現され、トゥルベツコイでは「音韻論的に重要な諸性質」と表現されているものは、それは単に音声の弁別的特性を言っているのではない。それは、「重要である」か「重要ではない」かの機能面での評価を含んでいる。そして、そのような「関与的特徴」の抽出は、実質的には、弁別機能という、人間の言語の基本的な機能を保証している特徴の抽出である。

・第6章 機能主義と構造主義-音声学と音韻論の区別についてのマルティネの見解-マルティネによれば、「音素」とは、関与特性の「束」そのものとみてよい。マルティネの用語では、「関与的特性」と表現され、トゥルベツコイでは「音韻論的に重要な諸性質」と表現されているものは、それは単に音声の弁別的特性を言っているのではない。それは、「重要である」か「重要ではない」かの機能面での評価を含んでいる。そして、そのような「関与的特徴」の抽出は、実質的には、弁別機能という、人間の言語の基本的な機能を保証している特徴の抽出である。しかも、「決定的に重要な特徴とそうでない特徴とをきっぱりと分ける手段となる音韻論の基本単位は音素ではなく、関与特徴なのである」(p.75,86 頁)という点であり、音韻論の単位としての「音素」は機能的な属性の束へと解体される運命になっているといえよう。

・第7章 「音素」概念の記号論的特異性---ヤーコブソンの「音素の構造について」(1939)の分析

本章では、構造主義言語学の泰斗ヤーコブソンの「音素」論が検討される。ヤーコブソンの議論の特徴は、後年コミュニケーションに関する独自の記号論として展開される記号論的観点からの「音素」論という点である。

音素や音韻論の特徴付けに関して、ソシュールの『一般言語学講義』では、まだ曖昧な点が多かったのだが、ヤーコブソンのこの論文においては、「音素」という言語要素の特徴を明確に定義するに至っている。また、ヤーコブソンは、『一般言語学講義』の見解に対して、特に「差異の体系」としての音素の体系>という特徴付けを、他の言語要素にまで敷衍し、言語体系全体を<弁別的要素からなる体系>と見なしたことに、鋭い批判を展開している点が注目される。

・第8章 トゥルベツコイの『音韻論の原理』における「音素」の概念とその存在論的位置づけ

本章においては、プラハ言語学派の創唱者の一人で、彼自身ソシュールやヤーコブソンに影響を受けたトゥルベツコイの『音韻論の原理』(1939)での「音素」概念について考察した。特にそこでは、音素とはいかなる存在論的位置づけがなされているかを哲学的視点から考察した。哲学史上の普遍論争に関係し、経験論以降の「抽象化」(abstraction)の議論にも関係するものであった。また、最後にはソシュールの「価値」概念が引き合いに出され、ソシュールの<差異の体系>としての言語という全体的なビジョンに通ずる観点が出された。そして、少なくともトゥルベツコイは、ソシュールの言う<対立的、関係的、否定的要素から成立している体系>というものは、まずは音韻論的体系であるという点である。

・第9章 構造主義的思考と現象学的還元

本章では、スイスの現象学者で、ヤーコブソンに対するフッサールの影響をいち早く研究した哲学者エルマー・ホーレンシュタインの次のような主張を検討した。つまり、<音韻論の研究対象たる音素(音韻)が、弁別特性から特定される抽象的存在であるのに対して、その音響学的実体を可視化したデータであるフォルメントは、言語認識に対して現象学的還元を行った時の成果の一部に、つまり「現象学的残余」に対応している>という主張である。結局われわれは、<ホーレンシュタインの主張は、言語認識にかかわるワーキング・メモリや短期記憶、さらには長期記憶の関与に関する最近の理論を考慮すると、必ずしも妥当であるとは言えず、もしフッサールの手法として現象学的還元が必要だとしたならば、単にフォルメント分析をするだけではだめで、むしろフッサールが時間論で解明しようとした「過去把持」と「未来把持」(予期)の機能を考慮に入れることで、現象学的志向性理論として言語現象を解明することになる。